
たぶん異世界トリップ

乙羽真維

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶん異世界トリップ

【NZコード】

N4972W

【作者名】

乙羽真維

【あらすじ】

成人一步手前の女子大生。今日も「ぐぐく普通の一日を過ぐ」したはずだったのに。大学の帰り道、自宅最寄駅で異世界トリップをしてしまったらしい。……たぶん。住んでいる世界とともによく似た、だけれど住んでいる人はほぼ人外。そんな世界へトリップした女の子の話。主人公が男装する為、BL^{ボイズラブ}風に見えるシーンがあるかもしれませんので、苦手な方はご注意下さい。

01・たぶん異世界トリップ

直ぐには異変に気付け無かつた。いつもとは違う光景を認識してはいたけれど、「今日つて何かのお祭りでもあつたっけ?」程度にしか思わなかつた。

大学の5限目の中講義を終えた後、小腹が空いたからと友人とファーストフードに立ち寄つて、ポテトとシェイクで程よく満たされたところに、最近彼氏が出来たばかりの友人の惚氣話で少々胸焼け。いや、最初は聞いていて楽しかつたのよ。でもさ、彼氏の居ない独り身の私にとっては少々糖度が濃すぎたというか。今が楽しい時だから友人も話したくて仕方がないのだろう。それに付き合つていたら、お店を出た時には外はもう暗くなつていた。長居し過ぎたとは思つたが、そんなこと珍しいことではない。何時には帰ろううね、なんて最初に決めてはいても、話が盛り上がり時間超過でいることなんてしまつちゅうだ。

「まいつたな……」
「まいつたな……」

だった。

……そのはずだ。

自宅の最寄駅。ホームのベンチに腰を下ろす。

電車から降りた瞬間感じた違和感。見える景色はいつもと変わらない。だがホームに居る人々がいつもと異なつていた。……って人々って言つても良いのだろうか? 人間……なんだよね? 違うと

言われても困るのだが。

猫耳或いは犬耳、はたまたウサギ耳、要は獸耳に尻尾をつけた人々。耳と尻尾だけではなく、服から出ている素肌の部分もしつかり毛に覆われていて、顔も猫や犬になりきつている人々。白い羽やら黒い羽をつけた人々。死神が持つような鎌を携えている人々。勿論偽物だろうが……本物だつたら銃刀法違反だしね。乗車する際に駅員によく止められなかつたなと思つてみたり。とにかく、ここはどこのコスプレ会場か！？ と言いたくなる光景。それにしても良く出来ている。質感が本物に近い。それにあからさまに衣装を纏っているという感はなくとても自然だ。本当に人間なんだよね？ といふか人間であつてくれ。

私と似た身なりの者ももちろん居る。が、何故か皆異様に背が高い。コスプレしている人もしていない人も背が高い。私の身長は平均以下なので、彼らと並ぶとかなりの身長差だ。同じ女性でも頭二つ分ぐらいは軽く差がある。私と同じぐらいの身長の者も居ないことはないのだけれど、目につくのは髭を豊かにたくわえた男性ばかり。ファンタジー物に出てくるアレだ。ドワーフなイメージ。どうやら私が出来そうなコスプレは、この状況ではドワーフが有力か？

……いや、しませんから、コスプレ。

最初何かのお祭りかとも思つたけれど、そんなイベントがあるなんて話は聞いていない。

アニメ発祥の地とか、萌えを提供するお店があるわけではない、住宅街がメインの駅。

ホームに降り立つて呆然とすること30分。ベンチに座つて更に30分。流石にこの状況が楽しいイベントではないことには気付い

ている。認めたくないだけで。

ちらりとベンチ脇の看板を見遣る。

「闇が峰なんて知らないし」

ベンチ脇の駅名が記されている看板には『闇が峰』の文字。私が利用している最寄駅名は『光が峰』であつて、『闇が峰』なんて駅は知らない。

万が一駅名まで変える様な大掛かりなイベントを開催していたとしても、事前に告知されるだらうし、注意書きも目立つところにあるはずだ。それらが無いのだから、今私が居るここは『光が峰』ではなく『闇が峰』で正しいのだらう。

友人と別れて、乗った電車はいつもと変わらなかつた。帰宅する乗客で混んでいた車内では、座ることなくずっと立っていたので寝過ごして違う駅に着いてしまつたということもない。そもそも私が利用していた沿線で『闇が峰』という駅は存在しない。

ホームに降りた瞬間、この『闇が峰』に迷い込んでしまつた……のだろう。

これがいきなり森の中とか、海の上とかだつたりすれば「瞬間移動？」それとも異世界トリップ？」とかいう思考に直ぐに辿り着けたものの、なまじ駅の風景が『光が峰』と同じものだから俄かには信じがたい。

しかしここが『光が峰』でないことは事実。そして『闇が峰』であることも事実。

携帯は勿論圈外。果たして私が持つてゐる定期で改札から出られ

るのか。出でなければ精算することになつた場合、私が持つておるお金は使えるのか。

改札を無事出られたとしても、どうに帰れば良いのだろう? までは自宅があるはずの方面に向かうつもりではいるけれど。そこには家族が居る可能性はかなりかなり低い。

となると……。

「おじーさん、おかーさん、ついでにサトシ……」

急に心細くなつた。どうやつたら自宅のある『光が峰』に帰れるのか分からぬ。すぐに帰れるのか。それともずっとこのままなのか。それは嫌だ。時々ウザく感じる」ともあるけれど、やっぱり家族の元に帰りたい。

あつ、ちなみにサトシは弟の名前。ついでで、ゴメン。だつて最近ちょっと生意氣なんだもの。昔は「おねーちゃん」って片時も離れずくつついていたくせに。弟のくせに可愛くない。弟だから可愛くないのか? ……まあ今はどっちでも良い。可愛くなくても、サトシは私にとつて大事な家族であることには代わりないのだから。

家族を思い出したら余計に心細くなつたのか、鼻の奥がツーンとして目に涙が集まってきた。やばい。こんな公共の場で泣くのは恥ずかしい。咄嗟に俯き、ギュッと目を瞑じて泣きそうになるのをやり過ごす。

そして俯いたまま目を開けると、紳士物の黒の皮靴が目に入った。こちらを窺う視線を感じる。恐る恐る顔を上げれば、黒髪で西洋風の顔立ちをした男性と目が合つた。

「随分長じて」と迷子に問いかぶるが、もしかして迷子か？」

「ち、ち、違つ」

いや違くありません。思いつきり迷子です。が、この歳で迷子と言つのは恥ずかしくて思わず否定してしまつた。ここには素直に迷子を認めて助けを求めるべきところだつただらう。

「では捨てヒューマンか？」

「……は？」

「ヒューマンなのだろ？」

ヒューマン……人間であることは認めるが、それって確かめるようないこと？ それに『捨て』って聞き捨てならない言葉がついていたのは氣のせいか？

「ヒューマンでここまで魔力があるのは珍しいな。だからってまだこんなに小さな子を捨てるとは赦しがたい」

やつぱつやつときの『捨て』は氣のせいではないのか。捨てられたのではない。現状を把握しきれてはいないが、十中八九迷子だ。「あなたのおうちはじですか？」と聞かれても答えられない迷子だ。住所は言えるが、恐らくこの世界には存在しない住所で、それでも

つてここからの帰り道が分からぬ迷子だ。

それに小さい子呼ばわりされているけれど、只今19歳。童顔ではないつもりだが、平均以下の身長のせいでも、実年齢よりも下に見られることがある。でも小さな子呼ばわりされる程下に見られたことはない。……が、ここ『闇が峰』の背の高い人々の中では、子供扱いされても仕方ないかもしない。非常に不本意だが。

そういうえば捨てるとか小さな子供とか以上に、もつと聞き捨てならない単語があつたよね。『魔力』って何？ そんな物持つた覚え全くないのだけれど。どうとか、ここは『魔力』なる物が存在する世界つてこと？ あーこれは異世界トリップ確定？

「名前は？ 僕はクロード。お前は？」

「…………マコト」

「マコトか。よし、俺が拾つてやるわ」

「は…………？」

差し出された右手に、流されるまま自分の右手を重ねるが……。ちょ、ちょつと待つた！ これで契約成立とか言われたら困る。捨てられたわけじゃないんだから拾つてくれるな。

「今から俺が主だ。宜しくな、マコト」

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは名前しか知らない男に拾われてしまいました。来年成人を迎える女性としてこれで良いんでしょうかね？

ズズツ……と、音を出すのは行儀が悪いかと思いつつ、1時間半前飲んだ物と同じバニラシェイクを口に運ぶ。

違う物を頼めば良かつたかなと頭の片隅で思つたが、体が糖分を欲していたので後悔は無い。うん、甘い物つて落ち着く。

本日2度目のファーストフード店。1度目と違うのは、場所は大学近くではなく、自宅の最寄駅もどきの閻が峰の駅ビル内。そして私の目の前に座っているのは、友人ではなくクロードと名乗った男性。ちなみに彼が飲んでいるのはホットコーヒー。砂糖とミルクを使う友人とは対照的に彼はブラックだ。

私を拾つと言つたクロードさん。流されるがまま連れて行かれては堪らないと、「きちんと自己紹介したい」と言つてここに連れこんだ。名前しか知らない男性に、どこまで事情を曝け出しても良いものか迷つたが、捨てられたという誤解だけは解いておかねばならない。そうでないと本当に拾われてしまうのだから。

ちなみに定期券は案の定使えなかつた。しかし私が持つていたお金で精算は出来たので無事改札から出ることが出来た。どうやら通常は私の世界と同じらしい。そのことにはホッとしたが、あまり所持金が残つていないので今の状況は安心出来ない。

まあそんなお財布都合で、選んだ店がファーストフードだったのだが。そんな私の事情を知つてか知らずか、シェイクの代金は彼が支払つてくれた。「マコトはまだ子供なんだし素直に甘えなさい」だつて。

そういうえば駅の改札での精算でも彼が支払おうとしていたのを思い出す。あの時は私が自分の持つているお金を使ってみたないと駄々

こねて押し切つたのだが……。精算をしている時、クロードさんと何故か駅員さんまでもが、小さい子供の初めてのおつかいを見守るかのような瞳で見ていたのが非常に気になる。いつたい私はいくつ子供に見られていいんだろうか。問うてみたいが敢えてそこは聞いていない。逆に年齢を問わることもしていないので言つていな。実年齢を誤解されている節はあるが、この誤解を解くのは今は保留。ほら、幼く見られていた方が有利なこともあるかもしないでしょ？ とりあえず今の優先事項は捨てヒューマンではないという誤解を解くこと。

「マコトは異世界……こちらで言ひ、256ニアから来たという訳か」

誤解を解くにあたり、闇が峰の人間ではなく、光が峰から来た旨を伝えた。電車から降りたら、光が峰ではなく闇が峰だったと。

結果、意外にあっさりと話を信じてくれ、そしてこちらの世界のことを少しだけ知ることが出来た。

こちらの世界では、異世界渡りは珍しいことではないそうだ。ある程度の魔力を保持している者ならば、誰でも出来るとのこと。とはいえる間はそれに相当しない。基本、人は魔力を保持しない。基本と条件つけたのは、最近魔力を保持する人間も増えてきたから。

こちらの世界に初めて人が訪れたのは、もう何千年も昔のこと。異世界渡りをしたこちらの者が、人間をペットとして連れて帰ってきたのが始まりだそうだ。大昔は、捨て犬、捨て猫同様、捨てられる人間も居たのだとか。何て酷い話だ。

しかしここ数百年で、ペット（人間）は家族の一員という考え方が広まり、捨てられる者もだいぶ減ったとのこと。そしてここ數十

年では、人を伴侶に選ぶ者も増えてきており、その夫婦から産まれた子供達は、人間の遺伝子を強く引継いだ子でも、多少の魔力を持つているそうだ。とは言つものの、異世界渡りをするだけの魔力を保持する人間の子はそつそつ居ないらしい。

クロードさんは相手の魔力がある程度見ることが出来るそうで、私の魔力を見てもらつたところ、異世界渡りをするだけの魔力を保持していることが分かつた。

「もしかして、マコトの『両親どちらかが、こちらの人間なのか？』

「い、いや……違うと思います」

異世界渡りが珍しくないことと同様、こちらの者が私が居た世界に移住することも珍しくないらしい。特に私が居た世界……こちらでは256エリアと呼ばれている世界は、こちらと言語と環境がほぼ同じだそうで、初めて異世界渡りをする者や移住を希望している者に人気のエリアとのこと。

知らないだけで、ご近所の人や友人、更にもつと身近な家族が、実はこちらの者だったりするのかも知れない。

まさか、お父さんかお母さんのどちらかが……。

いやいや、それはないだろ？ 今までそんな素振りを見せたこと無いし、もし魔力なんて持っていたとしたら血運しちゃいそうな親だもの。

でも敵を欺くにはまず味方からと、異世界人であることを隠すために私にも隠していた可能性だつてある。

うーん、これは考えても答えが出ないので一先ず保留。

「で、捨てヒューマンでないことは分かつて頂けたでしょうか？」

「ああ。勘違いして悪かったな」

うん。誤解が解けてめでたしめでたし。

「だが帰れないんでは、この後どうする？」

「うう……」

そうなのだ。異世界渡りをするだけの魔力はある。だけれど魔力があるだけでは異世界渡りは出来ない。

クロードさんに魔力量を見てもらつた時、私に異世界渡りをするだけの魔力があつたから偶々何かの拍子にこつちに来ちゃつたのかな？ 魔力があれば誰でも異世界渡りを出来るっていう話だし、簡単に元の世界に帰れるんじやん？ と思つた。

異世界渡りをするには魔力を用いなければならない。魔力を使用する際、呪文なり魔方陣なりが必要となるそつだ。それが人によつて違うとのこと。無詠唱で魔力を使う者も居れば、魔方陣も呪文も必須な人も居る。クロードさん曰く、魔力の使用はイメージ。呪文や魔方陣はあくまでイメージを明確にし現象化させる為の手段。別に呪文や魔方陣で無くとも、上手くイメージを湧かせられるのであれば、スキップでも大声で笑うとかでも何だつて構わないらしい。

私もこちらの世界に来た際に、魔力を用いる為の何かをしたはず……なのだそうだが。その感覚を思い出せれば元の世界に帰れるだろ？」クロードさんは教えてくれたのだが。

……全くもつてそんな記憶は無い。

だつて気付いたら闇が峰の駅に居たんだもの。いつも通り、普通に電車からホームに降りただけだ。特別なことをした覚えは無い。

今回の私みたいに、無自覚に魔力を用いる者も居るらしい。主に小さな子供。無自覚に魔力を使い転移して迷子になる子も居るんだとか。ただそういう事故を防ぐ為に、幼い内から魔力の使い方は練習させられるらしい。

魔力が無いとされている世界で生活していた私は、勿論そんな練習などしていない。魔力の使い方にに関して言えば、私は幼児と一緒に魔力の使い方が分からないので、元の世界に帰れないのだ。

「とりあえず、俺の所に居候するか？ 空いている部屋はあるし、マコトが帰れるようになる日まで居ても構わないぞ」

「……この世界で行く当ではない。だからと言つてすぐに帰れそうもない。ホテルに宿泊するだけのお金は……残念ながら持ち合わせていない。となれば、誰かに頼るしか術はなさそうだ。」

「……クロードさんの所にお邪魔させてもらつても良いんですか？」

「ああ。元々拾つもつだつたのだし。生活費も面倒見てやるから安心しin」

よし、いじは素直に出来させりやおつ。

「クロードさん、暫くの間直しくお願ひします」

「ああ。改めて今から俺がマコトの主だな。宣しく」

「…………あれ？ もしかして捨てヒューマン扱いの時と状況あんまり変わつてない？」

捨てヒューマンの誤解は解けたけれども、クロードさんが主人になることには変わりない訳で……。

「『主人様？』

あ…………。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは『主人様』

とお呼びする相手が出来ました。帰るまでの期間限定ですが。

「あのな、マコト。俺のことはクロードで構わないぞ」

あつ、ううですか。

「おこどりした? 遠慮せず入れ

現在クロードさん宅前。立ち止まつたまま動かない私をクロードさんが玄関に入るよう促すが、驚き過ぎて足が動かない。

ファーストフード店で、クロードさんの所に居候させてもうついとが決まった後、駅ビルで夕食の惣菜など簡単に買い物を済ませクロードさん宅へ。

駅ホームだけでなく、駅ビル内も街の様子も、私が利用していた光が峰とそっくりだなと周りを観察しつつ歩いていたら……。恐ろしい程クロードさん宅までの道程が、私が良く知っている道程と同じで。『まさか……まさか……』と思つたらそのままかだった。

住み慣れた我が家! ……と全く同じ外観の家。そこがクロードさんの家だった。

「マコト?」

間抜けにもぼーっと口を開けていた自覚は少なからずある。そしてそれを不審そうに見ているクロードさんの視線も何となく気付いてはいる。でもね、驚いたんだから仕方ないじやない。

だからといって、ずっと立ち止まつている訳にもいくまい。驚きはしたものの、好都合ではないかと自分に言い聞かせて玄関へ向かう。暫くここでお世話になるのだ。だったら自分が居た世界と出来るだけ近い方が、生活がしやすいに違いない。ここだったら駅まで

の間、迷子になることもないし。

「お邪魔します」

物が置かれていない玄関。良く言えばとても片付いた、悪く言えば殺風景……そんな玄関。

我が家とは違う。私より先に帰っているであろう、サトシの踵を踏み潰したスニーカーはここには無い。下駄箱上に飾られている、お父さんが気に入っている小さな絵画もここには無い。お母さんが毎朝水をあげている、玄関外の鉢植えもここには無い。そして家族四人の名前が記された表札は勿論ある訳が無かつた。

とても良く似ているのに、ここは異世界なのだ。……と、今更だけれど実感が湧いてきて、ほんの少し寂しくなった。

「先に部屋を決めておいた方が良いか」

と案内されたのは一階。リビングやキッチン、バスルーム等共用スペースは一階。個室は一階にある。外観だけでなく、中の間取りも我が家と一緒にだ。

空いている部屋だつたらどの部屋を使っても良いとのことなので、階段上つて直ぐの左側の扉を「ここが良い」と指差す。そこは我が家では私が使っている部屋。

しかし残念なことに、その部屋はクロードさんが使っているとの

」と。「奥の部屋が広いぞ」とクロードさんは勧めてくれたが、そんなことは百も承知。我が家では両親が寝室に使っている部屋だ。家族が居るのならともかく、クロードさん一人で生活しているように……広い部屋を使用していないことが不思議。

「マコトが左の部屋が良いなら、俺が部屋を移るが

「こやいやいや結構です。右の部屋使わせて頂きます」

「ひからは居候の身だ。クロードさんに部屋を移つてもひからだなんてとんでもない。それに居候が一番広い部屋を使うのも変な話だ。右側の部屋、我が家ではサトシが使つている部屋を使わせてもらひからることに決めた。

とは言え、クロードさんが何故左の部屋を使つているのか気になつたので尋ねてみたら、単に階段に近いからという理由だけだった。歩く距離が短い方が良いからだと。……もしかするとクロードさんは横着な性格なのかもしれない。

「じゃあ次は一階、キッチンやトイレ、風呂の場所を案内するよ」

恐らく私が知つてゐる間取りと同じはずだろしが、案内してもらひうことにする。万が一といつこともあるし。

階段下りた目の前がリビングダイニングキッチン。玄関同様、物はあまり置かれておらず、リビングには大きめのソファーが一つ。ダイニングに四人掛けのテーブルと椅子。その程度しか置かれてい

ない。

廊下の途中にトイレ。そして廊下奥がバスルーム。やはり間取りは我が家と一緒にだ。

最後に案内されたバスルームで、クローデさん的手にしていた袋を手渡される。駅ビルで買い物した時の袋だ。

「俺は夕飯の支度をするから、その間にマコトは風呂を済ませておくと良い」

「夕飯の支度をするんだつたら、自分もー。」

支度と言つても、惣菜を買つてきたからあまりすることはないと思うが。とはいえるクロードさん一人に押し付ける訳にはいかない。それに家主より先に風呂を使わせてもらうのは気がひける。

「今日は初めての異世界渡りで疲れただらう。支度は俺がしておくれからマコトはゆっくり体を休めなさい。着替えはその袋の中に入っている」

駅ビルで食べ物以外の売り場にも立ち寄つたが、てつきりクロードさんの物を購入しているんだと思つたら、どうやら私の着替えを購入していくれたらしい。何て気が利くのだらうと袋の中を見て……固まつた。

「えつと、これ……」「

袋の中にはルームウェアと下着。その中から下着……パンツを取り出す。

「ああ、そのキャラクター、最近子供の間で流行っているヒーローらしいんだが。マコトはこちらに来たばかりだから知らないよな。うつかりしていた、すまない。他のキャラクターにすれば良かつたな」

キャラクターがプリントされたパンツ。実はこのキャラクターは知っている。私の世界でもこのキャラクターは存在するから。って問題はそこでは無い。私が手にしているのは明らかに子供用の下着。……と、これも不本意だが今は問題では無い。実年齢より幼く見られてているのは承知しているから。問題なのは、この下着が男児用だということ。そう、女性用の下着ではなく、男性用の下着なのだ。

「マコトが男の子で良かったよ。女の子の物は良く分からないからな」

どうやら私、男の子だと思われている模様。誤解されていたのが捨てヒューマンと実年齢だけだと思っていたのに、性別まで勘違いされていたとは。男だと間違われるのは正直凹むけれども、実は元居た世界でもあったこと。普段パンツスタイルが多く、髪もショート。何より女性らしい凹凸が無い体型のせいで、男性に間違えら

れることは少なくなかつた。

とはいへ、この勘違いは不味い氣がする。年齢は聞かれるまで黙つてじよつと思つてゐるけれど、流石に性別は明かしておいた方が良いよね？一緒に生活するのだ。性別を誤解されたままでは生活しへへい。

「あの、私……」

「まあ女の子だったら居候わせようとは思わなかつたけれどな

私、女です……と言いかけた言葉を飲み込む。

そ、そうだよね。いくら子供と勘違いされていいるとはいえ、男女が一人つきり、一つ屋根の下で暮らすというのは問題有り……だよね。私だって全く危機感が無かつた訳ではないのよ。でもこいつの世界で行く当ても無ければ、ホテル生活するだけのお金も持ち合わせていなかつたのだし。

ここは女だつていふことを黙つておくべき？いやでも……。暫しの困惑は、クロードさんの一言でことり終結した。

「女は苦手だ」

やう言つたクロードさんの声は、元々低音ボイスであるのに更に低く、地を這うかの」とく低く低く。深海に引きずり込まれたかのような息苦しに背中に嫌な汗が伝つた。恐る恐るクロードさんを窺えば、眉間に皺を寄せ、切れ長の目がつり上がり怖い表情になつてゐる。

相当女性が苦手らしい。いや苦手といつてベルでは済まなぞやつだな。田の前に女性が居たら、容赦なく排除しそうな雰囲気だ。うん、はつきり言おひ。今更「女でした」と間違つても言えない。怖くて言えない。私の生存本能が「女だと言つた」と訴えている。

「マコト?」

まだ低めは残るもの、元の声に戻つたクロードさんと呼ばれてギリギリする。

「あの……男で良かつたです」

「もうだな」

「お葉に甘えて、先にお風呂を借りますね」

クロードさんの視線から逃れるべくバスルームへ入り込む。閉じた扉越しに、離れていくクロードさんの足音を聞いてホッと肩の力を抜いた。

「今から私は男」

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、女を捨てたマコトをお

許し下さい。って大げさですね。男の振りをするだけです。そちらに帰るまでの辛抱です。こちらで生きる為に、頑張つて男を演じてみせましょう。

とりあえず熱めのシャワーを頭から浴びる。何となくではあるけれど、血行が良くなり頭の回転も速くなつた気がする。うん、あくまでそんな気がするだけなのだが。

しかしこの短時間で考えねばならないことがある。風呂から出たら、私は男性の振りをしなくてはならない。これからずっと。ここで生活している間は、決して女性だと勘付かれではないのだ。

今後男性の振りをするにあたり、注意しなくてはいけない点を考える。

「ぼ、僕…………つわあーつ、駄目だつ！」

まず一人称を私から僕に変えてみようかと思つた。手っ取り早く男性を演出する方法だ。と思ったのだが、シャワーを浴びている腕は鳥肌が立つている。ボクつ娘キヤラじゃないのに、自分のことを見つめると誤魔化す方向で。

「無理だ、無理。『私』のままにしていろ

男性だって自分のことを私と言つし問題無いだろ。少々堅苦しく子供らじくも無い気もするが。そこは居候といつ身で謙虚に振舞つてみると誤魔化す方向で。

振る舞いは……女性らしさと言われたことは無い。寧ろサトシに

は「もう少し女っぽくしろ」何て言われていたし。特に気をつける点は無いのかもしない。言つていて空しくなるが。

「後は……声か」

男性を意識して、多少低めに話した方が良いのだろうか？ しかし数日ならまだしも、ここで生活が長くなる場合ボロが出そうだ。だったらこのままの方が自然だろう。都合の良いことに子供と間違われているようだし、まだ声変わりしていないってことにしておけば何とかなりそうだ。

結論、何も変更点無し。……まつ、いいか。

風呂を終えルームウェアに袖を通す。子供用らしいがサイズはピッタリ。

ダイニングに向かう前に、今まで着ていた洋服を置きに一階の部屋に戻ると、既に布団が敷かれていた。クロードさんが敷いておいてくれたようだ。それは有難い。しかし布団の大きさに驚愕した。

「何これ。もしやこれが通常サイズ？ 軽く一人は寝られそうだし。足元すごく余るんだけれど」

掛け布団をめぐり、大の字に寝転がる。両手を広げても布団からはみ出ることは無い。大は小を兼ねると言つが、これは良い。大きな布団を独り占め。贅沢な気分だ。それに普段はベッドを使っていたので、布団で寝るのは新鮮だ。どこか旅館にでも来た気分が味

わえる。

まあ、旅館……ただの旅行先であつたら良かつたのだけれど。こ
こは異世界。

いつ帰れるのかは分からぬ。ただ救いなのは帰れる可能性がち
やんとあるということだ。そして帰れるまでの間、お世話になれる
場所も見つけた。

「早く魔力の使い方、身につけないと」

魔力があることは分かった。分からぬのはその使い方。それさ
え分かれば私は元の世界に帰れる。お父さん、お母さん、サトシの
所に帰れる。

だから、早く、早く……。

ふと目を開けると、部屋の明かりが消えていた。足元に避けてお
いた掛け布団が何故か肩まで掛けられている。

どうやら横になつた後、寝てしまつたようだ。いつまでもダイニ
ングに現れない私を、クロードさんは気に掛け、ここまで来たに違
いない。寝ている私を見て、電気を消して布団を掛けてくれたのだ
らう。

起こしてくれても良かつたのに……。でもお蔭で体はすつきりし
た。自分が思つていた以上に、異世界渡りの負担が体にきていたの
かもしれない。現にすつきりはしたけれども、まだ体は睡眠を欲し
ている。夕飯を食べていなければ、今は食欲よりも睡眠欲の方
が勝つっていた。

鞄の中に仕舞つておいた腕時計を手探りで取り出す。時計の脇のボタンを押すとバックライトが光り、現在の時刻が表示された。

「十一時過ぎているのか……。流石にクロードさん、寝ちゃっているかな」

そつと部屋の扉を開けると暗い廊下。階下を覗いて様子を窺うが、物音もしなければ明かりも漏れてはいない。やはりクロードさんは寝ているようだ。

勝手知つたる我が家……ではないけれど、我が家と同じ間取りの家。廊下の明かりは点けずに、暗い中一階に下りる。

お腹は空いていないが、喉は渴いている。何か飲ませてもらおうとキッチンへ向かつた。

勝手に人様の冷蔵庫を開けて、しかも飲み物頂戴するのは気が引けたが、でも冷たい物が飲みたい。たぶん冷蔵庫に入っている飲み物を飲んだぐらいだつたら、クロードさんは怒らない氣がする。そういう思い冷蔵庫を開いたが、私が飲めそうな物は入っていなかつた。入っていたのは、私が食べずに残つた、ラップの掛かつた惣菜。それにビール。

ビール飲んだら……やっぱり怒られるよね。そもそも私未成年だし。じつちの世界の成人の年齢は知らないが、明らかに子供扱いされているのだから、アルコールは不味いだろう。

「仕方ない。水で我慢するか」

食器棚から出したグラスに水道水を注ぎ、それを煽る。それでもまだ乾きは癒えず、再度水を注いだ。今度はゆっくりと口を付ける。

冷蔵庫には残った惣菜が入っていたが、それが無ければビールだけ。男性の一人暮らしらしい冷蔵庫の中身……なのかも知れないが、普段どんな食生活をしているんだろう。

ぱっと見た感じ、最低限の調理器具は揃っているようだ。しかし普段それらは使われていないのかも知れない。

今まで料理は母親任せで、手伝う程度にしかやつてきていた。正直得意分野ではない。でも全く出来ないという訳でもない。居候させてもらひつ身だし、ここは料理当番を買って出よう。せつかく揃っている調理器具、使わなければ勿体無い。それに毎日外食、店屋物、惣菜購入なんて贅沢はしていられない。所持金は余り残っていない身で、クロードさんに養つてもらひつだから、節約できるところは節約しないとだよね。

一杯目の水が空になつたグラスを洗つて、洗いカゴに伏せる。布巾が見当たらなかつたので、そのままにさせてもらひ。明日、布巾の場所も聞かないと。

布巾だけではない。この家で生活していく上で必要になることを聞かねばならない。

夕飯の時に聞ければ良かつたのだけれど……。明日の朝、聞くのは難しいだろう。朝は忙しいのが相場だ。寝てしまつたのが悔やまれる。でも体が休息を欲していたのは事実。今だつて喉の渴きが落ち着いたら、眠気が襲つてきた。

早く部屋に戻ろう。

誰が見ている訳でもないので、出た欠伸で開いた口を特に隠すこともせず。下りてきた時と同様、暗い階段を上る。

上りきった所にある扉に手を掛け部屋に入った。部屋の中は暗いけれども、暗くてもどこに何があるか分かつてているから大丈夫。大丈夫……なはずなのに、途中何かにぶつかりながらベッドにダイブする。

……ん？ ベッド？

あれ？ と思つたけれども、睡魔には勝てずそのまま寝てしまつた。そう、何かおかしいと思つたのに寝てしまつたのだ。そして寝てしまつたことを翌朝後悔した。

翌朝、私はクロードさんが敷いてくれた布団の上ではなく、ベッドの上に居た。「おはよう」と挨拶しているクロードさんの真横に。そうだった。ここは私の部屋ではなく、クロードさんの部屋だつたんだ。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトは男の人と同じ布団で一夜を過ごしてしまいました。でも安心して下さい。不埒な行いは何もしていませんから。クロードさんが私の頭を撫でる手が、子供をあやすかの「ごとく優しいです。……こちらが空しくなるぐらいいに。

異世界へ来てから一週間が経つた。

一週間経つたが、残念ながら魔力の使い方はまだ分からぬ。こればかりは人それぞれだから色々と試すしかなからうと、クロードさんは『まりょくのつかいかた 100のほうほう』という本を私に与えてくれた。使い古した形跡の無いこの本は、私の為に買ってくれたようだ。有難い。有難いのだが……。本の隅に表記された対象年齢は2歳～7歳。内容は全てひらがな。非常に空しい。魔力の練習は幼い内からされるそうだから、大人向けの本は逆に無いのかもしれない。そう頭では理解してもやはり空しい。

空しさはさておき、文字が難なく読める現状は助かっている。こちらの世界での文字……ひらがな、カタカナ、漢字、私が普段使っていたものと同じであつた。魔力の使い方の前に、文字の習得から始めることになつていたら大変だつたと思つ。

お蔭で生活も全くと言つて良い程、苦が無い。一週間も過ごせば、家の中に何が何処にあるかも把握出来たし、生活面では全く問題がない。あるとすれば、クロードさんと私の部屋を間違えそうになること。

クロードさんの部屋は、我が家では私の部屋。その習慣から、うつかり間違えそうになる。現にこちらに来た初日、クロードさんの部屋で寝てしまった。翌朝焦るわ気まずいわどう誤魔化そつかと思つたけれど。クロードさんは「親が恋しかったのだろう」と頭を撫でてくれて。……そういうことにしておいてもらつた。実年齢が知られたら猛烈に恥ずかしいけれども。

それよりも、寝床を一緒にして女だとバレなくて良かつた。バレていたら、今こいつしてここで生活出来ていない。女だと気付いてもられなかつたことを少なからず悔しく思つけれど、やはつこひばれなくて良かつた安心感の方が勝る。

ひからに来たときに身に付けていた下着……女性特有の下着は、クロードさんが出勤している際にこいつそり洗つて部屋干しして、今は鞄の一番底に見つからないように片付けてある。現在身につけている下着は男性物。多少抵抗はあつたけれど今は慣れた。女性物に近いデザインの下着を選ばせてもらつたことも大きい。

胸はさらしを巻くとか特別なことはせず、少し厚着をしているだけ。……それで誤魔化せてしまつ自分の体型が悲しい。とはいへ、夏の薄着になる季節だつたら誤魔化しきれなかつただひつ。……多分ね。今が夏でなくて良かつたと思つ。遅くとも薄着になる夏までには元の世界に帰りたい。

ともかく、魔力の習得とは反比例して、こひらでの生活は順調だ。
順調どひつか……。

「マコトくん、おやつに美味しいよ

「はーい」

随分と楽な生活をさせてもらつてゐる。居候なのに良いんだらうか、これで？

机におやつのクッキーと紅茶を並べてくれてゐるのは、この家にお手伝いで來てゐるサラさん。私が来るまでは週に一回、この家に

来て掃除、洗濯等の家事をしていたそうだ。しかし私が居る今、週に三回、月曜、水曜、金曜に来てくれる事になつたらしい。

今日は金曜日、サラさんに会つのは三回目。毎回完璧に家事をこなして帰つていくので、私がやることはあまり残つていない。サラさんが来ない日の掃除、洗濯、食事の用意は、流石にやつてているけれど。サラさんが掃除した翌日は、掃除する程の汚れは無く。洗濯も一人分しか無い洗濯量に、水がもつたいないかな？ と、火曜日に一度洗濯機を借りたけれども、木曜日は使わなかつた。よつて私が置む洗濯物も無い。食事はサラさんが作り置きをしておいてくれるので、私が料理する機会は殆ど無い。サラさんが料理している時に一緒に手伝わせてもらつ程度だ。

家事つて意外に時間を取られるから、サラさんが来てくれて、魔力の使い方の練習に専念出来るのは嬉しい。でも家政婦を雇えるなんて、クロードさんていつたい何者？ 別に家政婦が居る家が物凄く珍しい訳ではないけれど。我が家は勿論のこと、私の周り、友人の家で家政婦を雇つてている所は無かつた。家政婦を雇う家つて、それなりに裕福な家つてイメージなんだよね。クロードさん、実はかなり稼いでいるとか、或いは実家が裕福なお坊ちゃんだとか？ そういうえば私を拾おうとしたぐらいだ。それなりに金銭面で余裕があるのかもしねりない。

……つて、そういうえば私、クロードさんのことを殆ど知らない。聞く機会はあつたはずなのに、生活面のことばかり質問していく、すっかりクロードさんについては何も聞いていなかつた。一週間お世話になつていて今更だけれど。

「ねえサラさん、クロードさんってヒューマンではないんですね？」

「ええ、勿論」

ですよね。背は高いけれども、人とは変わらない容姿をしていたので念の為の確認。やはりヒューマンではない。

「じゃあ、獣人？」

サラさんは猫の獣人だそうで、ほほヒューマンと容姿は変わらないが、耳だけは猫耳だ。非常に可愛い。サラさんが獣人なので、もしかしたらクロードさんもそうなのかな？と思いついてみた質問だったのだが。サラさんは「もしかして聞いていなかつたの？」と瞠目している。

「私から教えて差し上げても宜しいのだけれど。でも、もしかしたら一週間もお話にならなかつたのは、お考えがあつてのことかもしないですしつ……」

という訳で、直接聞いてみるとこした。

私がからクロードさんに質問するのは、大抵食事の時。クロードさんが「何か聞きたいことはないか？」と尋ねてくれるのを質問がしやすいのだ。と言つても、この問い合わせは一昨日からは無くなつたのだけれど。

問い合わせてもうえないのであれば、どのタイミングで聞けば良い

のだらう。あまり食事を邪魔したくもないし。それに何て質問しよう。

夕食の肉じゃがを口に運びながら、向かいに座るクロードさんをちらりと窺う。その私の視線に気付いたクロードさんが「何だ？」ときつかけを作ってくれた。

「えっと、クロードさんって何者ですか？」

クロードさんもだが、質問した私ですら一瞬固まる。確かに何者？ とは思っていたが、ストレート過ぎて失礼な質問だ。

「サラリーマンだ。IT関係の仕事に就いている」

私の質問の仕方を気にしないとばかりに答えてはくれたが、聞きたいのは職業ではない。いや一応知つてはおきたかった事項だけど。

「あの、そうじゃなくって。クロードさんで、ヒューマンでも獣人でもないんですよね？」

その質問で私の意図を分かってくれたのか、クロードさんが一つ頷く。

「俺は……魔族だな」

「……魔族ですか」

「ああ」

「随分と大雑把ですね」

ここには元々魔族の世界。住んでいる殆どが魔族だ。サラさんだけ魔族。人間が少数居るけれど、本来の人間……魔族との混血ではない人間はごく僅かだ。ゼロとは言わないが、居ないと言つても良い程の人数らしい。

魔族との混血の人間で、人間の遺伝子を強く引継いだ子は人として扱われるが、こちらではヒューマンと呼ばれている。

最初こちらで言うヒューマンは、私の思う人間とイコールだと思っていた。しかしヒューマンは、人間の純血ではなく、魔族の血が混じっている人。人間は、魔族の血が混じらない純血の者を指すといつことをサラさんに教えてもらつた。

サラさんと顔合わせの時、私はヒューマンとして紹介された。その時はヒューマンイコール人間だと思っていたから不思議に思わなかつたけれども、サラさんから教えてもらつた後では違う。私、正確には人間だよね？ と、そのことをクロードさんに話したら、人間は魔力を持つていない生き物だから、魔力を保持している私は、どこかで魔族の血が入っているヒューマンなのではないかという意見。例え人間だったとしても、この世界で人間は珍し過ぎるので、ヒューマンとして生活した方が都合が良いだろうということで、人間とは訂正せずにヒューマンとして過ごしている。

と、少々思考が脱線してしまったが、その間、クローデさんは口元に手をあてて悩んでいた。

「クローデさん？」

「確かにマコトが言つ通り大雑把だな。しかし今まで考えたことが無かった」

まあ普通、考えるようなことではないよね。私の場合、自分が人間だってことは、考えずとも知っていることだし。

「誰も俺にそういう問い合わせをする者はいなかつたしな」

確かに。貴方は人間ですか？　何て質問、したことわざされたことも無い。私が居た元の世界では。

「マコト、君はどういったヒューマンなのかい？」

「えっ？」

質問していたのに、質問で返された…？　突然の話の転換に驚く。

「私は……」

年齢は19歳。……だが今のところ秘密だ。これからに来た初日の夜の失態を思い出せば、永遠に明かしたくない。

性別は女性。これも秘密だ。年齢以上に明かせない秘密だ。

つて、自己紹介のメインどころで躊躇と、先に進みにくいものだな。クロードさんの問いは、私の年齢や性別、血液型や誕生日とかそういうものを聞いているのではないと分かつてはいるのだが。

「マコトが俺にした質問はそうこうしたことなんだ。己を知るというのは意外に難しい」

「うーん……。上手くはぐらかされたような。クロードさんは食事を再開してしまったので、この質問はここで終わりということなのだろう。私も皿に残っている肉じゃがを口に運び、食事を再開した。

私はどういった人間なのか……。次に同じ質問をされた時には答えられるようにしておこう。そうでないと、クロードさんのことを尋ねた時に、またはぐらかされてしまいそうだ。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、マコトはどうこうた人間なんでしょうね？　今の内にきちんと自己分析しておくれのも良いことですよね。就職活動で使えると思いますし。でもクロードさんみたいに大雑把な方でも、就職出来るようですよ。もしかしたらこちらの世界での就職活動は緩いのかもしませんね。それは惹かれますが、就職活動する年齢までここに滞在するつもりはありませんから。また明日も、マコトは魔力使用の練習頑張ります。

「ほりマコト、遠慮せずに食べなやー」

「遠慮していないです。本邦にお腹いっぴいで……」

「そんなことないだろ。育ち盛つなんだ。食べないと大きくなれないぞ」

いや成長期はとうに過ぎている。私の身長は高校二年の時に170cm伸びたつきり、それ以来伸びていない。これ以上食べれば成長するには縦ではなく横にだ。それは「めんこ」のつもりたい。

しかしクロードさんはこのちらを気遣うような視線に耐えきれず、「じゃあ、あと一切れだけ」と田の前のピザに手を伸ばした。

今日は土曜日。

今朝は、昨晩心の中で誓った、明日も魔力使用の練習を頑張るうとこう言葉を実行すべく、いつもより少し早めに起きた。いつもより早い時間なのに、クロードさんは既に起きていて、なんと朝食の準備をしてくれていたのだ。

本来朝食の準備は私の仕事。今日はクロードさんは休日。そのせつかくの休日に早起きさせて朝食の準備をさせてしまったことを申し訳なく思い謝ると、もつ少し大人を頼りなさいと恒例の子供扱い。しかも今日、明日は魔力の練習を休みなさいとのお達しで、早起きしたにも関わらず一気に手持ち無沙汰になってしまった。

土曜日と日曜日、クロードさんが休日の田はサウさんはない。

そしてこの一日分の食事の作り置きは無い。そういう契約らしい。

時間はたつふりがあるので、お皿は少し凝った物を作り。そういう思いながら朝食を食べていたら、クロードさんに「お皿は先配ピザを頼むつもりだから」と先手を打たれてしまった。

そして今に至る。

やはり最後の一切れは多かった。チーズで胸焼けしそうだ。

「クローデさん」

ピザが入っていた箱を片しているクロードさんに拳手し、発言の許可を求める。別にこんなことせず普通に会話しても構わないのだけれど、ここにははつきり意思表示する為にこの形で。

クロードさんに先制される前に、夕飯は私が作る皿を主張しようと。夜はさつぱりした物が良い。冷蔵庫の中身と粗談だ。

しかしクロードさんが「なんだ?」と問うると同時に、玄関のチャイムが鳴った。

「すまない、マコト。来客だ。後で良いか?」

「あっ、はー」

クロードちゃんと来客とのインターほん越しの会話を窺う限り、相手は配達業者の中だ。クロードさんが玄関で荷物を受取りそれで終了かと思ったが、業者が一人、大きな箱を抱えてリビングに入つ

てきた。それをリビングに置くと、抱えていた箱を解体する。箱から出たのは平らな板、四本の同じ長さで少し太めの木の棒、そしてネジ等の部品諸々。それらを業者の一人が組み立てていく。

「……テーブル？」

「ああ。ソファーの前にあると便利かと思つてな」

確かにソファーで寛ぐ時に、飲み物とか置けて良いと思つ。

組み立てた低めのテーブルをソファーの前に置くと、業者は箱を纏めて部屋から出していく。これで終わりかと思ひきや、新たな箱を抱えてリビングに入ってきた。

今度は何かと組み立てていく様子を窺う。どうやら棚らしい。ソファーから程よく離れた正面の壁際に置かれる棚。位置的にテレビ台になりそうだ。この家にテレビはないけれども。

棚の設置が終わると、クロードさんが業者に「宜しければ車の中で飲んで下さい」とペットボトルのお茶を手渡していたので、どうやら終了らしい。

クロードさんつてば大きなお買い物をしたんだなあ……と業者を見送ると、彼等と入れ違いでまた新たな業者がやってきた。

「クロードさん、今度は何ですか？」

「ん？ まあ見れば分かるよ」

クロードさんが言う通り、見て直ぐに分かるものだった。業者が運んでいる箱にも絵が描かれていたし。物理的には先程の棚の方が大きいが、金額的には今運ばれている物が一番大きな買い物だと思う。

リビングに運び込まれたのはテレビ。我が家の中よりも大画面。しかもこのテレビ一台で、DVD観賞や録画も可能らしい。我が家の中よりも高性能だ。……我が家に持つて帰りたい。そんなことしないけれど。

配線や設定等全て終了させ、業者が帰つたりビングで、クロードさんがテレビのリモコンを扱う。ボタンを押す度に変わるチャンネル。どのチャンネルも綺麗に映つていて。クロードさんも頷きながらテレビを見ているので、満足のいく買い物だったのだろう。

「マニアの世界でもテレビがあるんだろ?」

クロードさんの問いに頷く。

「今までテレビが無くて悪かつたな。これからは好きな時に見て構わないから」

……何となく嫌な予感がする。

「の家には今までテレビが無かつたので当然だが、クロードさんはテレビを見る習慣がない。でもこのタイミングで購入してきたの

は……。

私が居候しているから、…………なことじと無ことよね。流石に。
それは考え過ぎ、自意識過剰だ。

「ケーブルテレビのアニメチャンネルを幾つか契約をしておいたか
ら楽しむと良い」

見られる番組が子供仕様に偏っている気はするが……。テレビの
購入は偶々私が居るタイミングと被つただけだ。……と思ひ。きっと
と、たぶん、恐らく。

……このことについては深く考えないようにしよう。テレビ見ら
れるようになつて万歳！ 素直にそのことだけを喜んでおこう。
でもこの一週間、クロードさんと過ごして気になつたのは、クロ
ードさんは私に対して過保護……とこづか甘やかし過ぎてこると思
う。私のことを幼い子供だと思っているからだと今は思うけれど。実
年齢を明かしていないのが非常に心苦しい。

とはいって、年齢は明かすことなく帰りたいと想つてこるものも実情。

「マコト、嬉しいかい？」

「はい。見るのが楽しみです」

「じゃあ、早速見よつ。どのチャンネルが良いかな

渡された番組表を見ながら心の中で唸る。契約済みチャンネル内

で、特に見たいと思う番組が無い。普段アニメを見ないので、番組表に記されたタイトルからだけではさっぱり分からない。そもそも私の世界と同じ番組を放送しているとは考えにくいので、私がアニメオタクだったとしても、知っているタイトルは無いのかもしけなけれど。

あつ、でも意外に同じ番組が放送されていたりするのかな？

こちらに初めて来た田に、クロードさんから手渡された男児の下着。それにプリントされていたキャラクターは、私の世界でも存在しているキャラクターだったし。それに、未契約のチャンネルの番組をちらりと見ると、私でも知っている番組タイトルがちらほら。
……というか、寧ろ未契約のチャンネルが非常に気になる。そっちを見たい。

ああ……。お父さん、お母さん、サトシ、時代劇専門チャンネルを契約して欲しいだなんて、我慢言っちゃ駄目ですよね。そうですよね。分かっています。私、居候の身ですもの。クロードさんが契約してくれたアニメチャンネルだって、私の為だといふこと分かっています。アニメ、見ようじやないですか。そういえばサトシ、口ボットが出てくるアニメが好きだったよね？これを機会にお姉ちゃんもロボットアニメに詳しくなるから、帰つたら一緒に見ようね。

07・せめて腹九分目で

出そうになる欠伸を奥歯を噛み締めて耐える。瞬きを繰り返して眠気を飛ばそうと試みるが、閉じた瞬間にブラックアウトしけ、ハツとした。……今、船を漕いでしまったのではなかろうか？

今、私は猛烈に眠い。

クロードさんと早速テレビを見ることになり、何を見たいかと問われ、サトシが好きそうなロボットアニメを見るにした。と言つても、私はさっぱりアニメタイトルが分からなかつたので、「ロボットが出るアニメが見たい」旨だけをクロードさんに伝え、彼に選んでもらつた。一度5話連続放送のロボットアニメが放送されており、それを見ることに。

1話30分。それが5話。興味が持てる話だつたらあつという間の連續5話なのだろうが、残念なことに私好みでは無かつた。カタカナの名前が多すぎてついていけない。人の名前なのか、地域の名前なのか、ロボットの名前なのか、武器の名前なのか……。1話目まではしっかり起きて見ていたものの、2話目辺りから記憶が危うい。人間関係とかは面白そうなのだけれど、続きを気になるよりも睡魔の方が勝つてしまつた。

その睡魔と闘つているのだが、なかなか退散してはくれない。何しろこの状況が良くない。

満腹以上に満たされたお腹。食後は眠くなりやすいといつて、お昼にあれだけいっぱい食べたのだ。睡魔が訪れて当然。

そして私は現在心地良い温もりに包まれている。これで眠くなるなと言うのは酷だ。

お尻も背中も心地良い温もりを感じるこの状況。何故か私はクロードさんの膝の上。どれだけ子供扱いなの、クロードさん！と文句を言いかけた。が、実年齢を明かしていない身。それにクロードさんが、会社で子供の居る社員に、休日の子供との過ごし方を教えてもらったとかで実行する気満々。ソファーに座ったクロードさんが、膝をポンポンと叩き、「さあ、マコトおいで」と満面の笑みで言われてしまつたら…………断れなかつた。

我が家は家族仲が良い方だと思うが、父親の膝の上でテレビを見たのって、幼稚園の年少ぐらいまでだ。クロードさんに子供扱いされているとは言え、そこまで幼く見られているとは思つていなかつたのだが……。どうしよう、3歳ぐらいの子供に見られていたら。流石にそんなことないよね？

眠気を誤魔化す為に、テーブルの上のジュースに手を伸ばす。それをクロードさんが気付き、ジュースを手渡してくれる。そして私が飲み終わつたの見計らつてそのグラスをテーブルへと戻してくれた。

ジュースを飲んでも多少は眠気が紛れたけれども、この方法は何度も使えない。こう甲斐甲斐しく動かれてしまつと、申し訳なくてジュースもろくに飲めないのだ。

「マコト、飽きたか？」

素直に答えるか迷う。口ボットアニメを見たいと言つたのは私だ。言い出しておいて飽きたは失礼な気がして、首を横に振る。それに對しクロードさんは「そうか」と呟き、私の頭を撫でてくれた。撫でる手が優しい。それ故に更なる睡魔に襲われる。その眠気が

心地良過ぎて抗う気を削がれた。

お父さんの手とも、お母さんの手とも、サーシの手とも違つ手。クロードさんはまだ一週間しか一緒に過ごしていない。クロードさんについてはまだ知らないことが多い。それでも、この手は信頼して大丈夫だと、そう思えるだけの何かがある。一週間、短いようで、それでもクロードさんの人となりを知るだけの時間を、共に過ごしてこれと云ふことなのだろう。

優しくて、とても安心出来る手だ。

その手に軽く頭を委ね、重くなつた皿蓋をゆっくり閉じた。

睡魔に負けた私が田を覚ました時には、テレビの音は消えていた。そして視界も寝る前とは違つていた。それもそのはず。眠る前と体勢が違う。私はクロードさんの膝の上に座つていたはずだ。テレビを見ながら寝てしまつたのだから、本来なら見えるのはテレビ。あるいは首を落として自分の膝辺り。間違つてもクロードさんの顔が見える体勢では無かつたはずなのだ。

しかしクロードさんはぱつちり田が合つてしまつた。クロードさんは私を見下ろしている。座つていたはずのクロードさんの膝の上には……あ、れ？ 私の頭？

「『』、『』めんなさ』」

「れつて膝枕じゃん！ と慌てて起き上がろうとしたところを、急に動いたら良くない」と制される。一度はクロードさんから離

れた頭が再びクロードさんの膝の上に戻った。

クロードさんの手がまた優しく私の頭を往復する。その動きを邪魔しない様に、視線だけ動かし窓を見遣ると、カーテンを閉じていない窓の向こうは既に暗い。30分程度の転寝だと思つたが、どうやら予想以上に寝ていたようだ。

「疲れていたんだな」

「えっ？」

「マコト、早く家に帰りたい気持ちは分かる。だが無理は良くないよ。慣れない内の魔力の練習は、自分が思つてはいるよりも体力を消耗するんだ。少し練習を減らしなさい」

「無理をしてはいるつもりは無い。寧ろもっと練習を頑張りたいと思っていたのに。その私の不服を感じ取つたのだろう。苦笑と共に頬を撫でられた。

「体が万全で無ければ、使えるであろう魔力が発動しないこともあります。それでは練習が無駄になるだろ?」

「もうひとつもなことを言われてしまえば頷くしかない。

「よし。じゃあ夕飯にするか」

もうそんな時間なのかと驚き、起き上がりつて時計を確認すると、時になろうとしていた。

「いめんなさい。今から食事の準備します」

とは言えどじょう。夕飯を何にするか全く考えていなかつた。昼が重かつたから、軽めのものにしようというイメージだけで、冷蔵庫に残っている物の確認もしていない。

「ああ、それなら問題ない。出前が届いているから

「へ？」

クロードさんが指差す方、ダイニングテーブルには出前らしき器が並べられている。漆塗りのよつた黒い器。見覚えのある器には予想通りの物が入っていた。

「お寿司ー！」

「夜はさつぱりした物が良いと思つてな。マコト、寿司は大丈夫か？」

「はい、勿論」

今日は三食全て準備しなかつたことを申し訳なく思う。だけれど、夕食のチョイスは、クロードさんナイスだ！

…………しかし。

「あの、クロードさん。これ何人前ですか？」

「何人前とは書いていなかつたと思つが」

「そんなことなこと思つたですけれど」

机に置かれたままの、注文表を手に取り確認する。そこには小さく『5人前』の文字。

「えっと、クロードさん……」

「マコトは裔ち盤つだから、これぐらい軽く入るだろ?」

あ…………お父さん、お母さん、サトシ、マコトは裔ち盤る頃こま今より肥えていそつです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4972w/>

たぶん異世界トリップ

2011年10月5日21時22分発行